第３回
県立高等学校あり方検討会
議事録

令和３年１月２７日（水）

高校教育課高校魅力化推進室

第３回県立高等学校あり方検討会

【事務局】
〇委員の皆様こんにちは。定刻となりましたので、ただ今から第３回県立高等学校あり方検討会を開会します。本日の日程は、配付資料１ページにございます会次第に沿って行い、１６時の終了を予定していますので、御協力よろしくお願いします。

まず初めに、委員の皆様の出席を確認させていただきます。資料３ページを御覧ください。本日は委員の皆様全員に御出席をいただいております。なお、奥田委員については、オンラインでの出席となります。従いまして、資料の６ページ、設置要項第６条第２項の規定に基づき、本検討会が成立しますことを御報告します。

それでは、今後の議事進行については、設置要項第５条第２項に基づき、半藤会長にお願いします。半藤会長、よろしくお願いします。

【半藤会長】
〇皆様こんにちは。着座のままで失礼します。会に先立ちまして一言御挨拶を申し上げます。世の中さながらコロナ狂騒曲といった様相です。東京には非常事態宣言が出されておりましたので、葬式にすら行けない状況でした。一向に感染症が終息しないのは、人類が何かを忘れているのではないかというように思います。ワクチンのことではなくて、私たちの社会はどうあるべきなのか、私たち一人一人はどう生きるべきなのか、その辺りの価値観が少し見えなくなっているのではないかと考えます。教育は全ての人々の人生の羅針盤となるべきものであります。このような社会状況の中で、普遍的な価値観である、人はどう生きるべきかを私たちは、しっかりと児童生徒に教え込む、または考えさせるということが大切なのではないかと考えています。

本日の会議は、３月の答申に向けて、その詰めとなる協議です。先ほど時間の下限が示されましたが、こういう状況でもありますので、会議をいたずらに長引かせるよりは、さっさと切り上げることが肝要であります。さりとて、議は尽くす必要がありますので、事務局から資料の御説明をいただきましたあとは、委員に全員に御意見をまずお一方ずつ賜り、それを踏まえ、その後は自由討議としたいと思いますので、御理解と御協力をお願い申し上げます。

まず、この会議の公開非公開について定めたいと思いますが、特に非公開とする理由がないということで、公開としてよろしいでしょうか。

それではこの会議は公開とします。

では続きまして、県立高等学校のあり方と今後の方向性についての提言案に

ついて、事務局から御説明をいただきます。

【事務局】
　それでは、あり方検討会からの提言の素案を説明させていただきます、着座にて失礼します。まず作成するに当たっては、本検討委員会で、委員の方から出していただいた御意見とともに、熊本県産業教育審議会での答申の内容についても反映させていただいています。なお委員名簿や、検討会の経緯などは、本日は除き、本文のみをお示ししています。また、事前に委員の皆様に送付いたしました資料に、多少修正を加えています。どうぞ御了承いただきますようお願いします。
　それではまず提言の構成ですが、第一部が「再編整備等基本計画の成果と課題」、第二部が「県立高校の未来を考えるそのあり方と魅力づくり」という二部構成としています。
　表紙の裏に「はじめに」として、検討会設置の経緯や協議依頼内容を書いています。ここで、下から５行目ですが、これまでは「概ね４年間」としていましたが、概ねを取り「４年間」と明記しています。つまり、この提言でいう取組み期間を令和３年度から６年度の４年間と整理させていただきました。
　まず、第１部の再編整備等基本計画の成果と課題です。こちらは基本的には、第１回と第２回の検討会で議論いただいたものに、補足データを追加したり、タイトルや今後の方向の一部を修正しています。
　４ページを御覧ください。前回までの資料では、タイトルを「県立高校の再編統合」としていましたが、ここでは適正規模の下限についても扱っているため「適正規模（下限）」を追加しています。
　６ページを御覧ください。今後の方向の下から２段落目ですが、「こうしたことから」の次に「適正規模の考え方は一旦留保し」と修正をしています。これは、現実的に現在３学級以下の学校が１０校存在する中で、即再編統合ということではなく、各学校の実情に応じて魅力化に取り組んでいくとしたことから、適正規模の考え方を一旦留保という形で整理させていただくという趣旨です。また、一つ下の行で「当面」とありましたが、これを「提言期間中は」と修正しています。
　７ページを御覧ください。こちらは、タイトルに「（上限）」を明記しました。
　８ページを御覧ください。大規模校の学級減に関する今後の方向のところですが、前回の会議でお示しした県央学区及び旧熊本学区の中学校卒業者数の推移を、９ページ上段には熊本市内の生徒の動向を掲示しました。加えて、今回２つのデータを新たに追加しています。参考１は熊本市内の生徒の詳細な進路

状況ですが、熊本市以外の公立高校に進学している生徒は４２２人で、約６％となっています。また１０ページの参考２は、熊本市内の公立高校入学者の出身地地域別の内訳ですが、約９割が県央学区の出身であることが分かります。このことから、大規模校の削減を現段階で行ったとしても、この傾向に大きく変更はないものと考えています。

９ページに戻り、中頃の「このため」以降を御覧ください。大規模校の学級減について、「熊本市外の高校の魅力化と併せて」という文言や「私立高校や高等専門学校等、県立高校以外の入学状況」という文言を追加し、最後には「引き続き検討を続けていく必要がある」と修正をしています。

次に通学区域の拡大についてですが、１２ページを御覧ください。前回の会議で、生徒の流出入状況などの動向についても考察が必要ではないかとの御意見をいただきました。そこで、３つのデータを掲載しています。

まず、１２ページ下段に、旧学区から旧熊本学区、これは熊本市内の高校となりますが、旧熊本学区への進学者数の推移をつけています。これを見ると、旧宇上学区では、熊本市内の高校への流出が１０％程度増加しています。それ以外にも旧菊鹿学区、旧阿蘇学区でも増加傾向です。

１３ページには参考として、参考１は旧学区から新学区内の他の学校への流出割合で、参考２は旧学区から県外を含む学区外への流出割合を掲載していますが、これらのデータから、更なる通学区域の拡大が旧熊本学区への受検者の増加につながる可能性があると考えています。

１２ページの今後の方向の書きぶりとして、旧宇上学区からの熊本学区への流出状況や、全国的にも全県一区化の動きは２５都府県にとどまっていることを追加で記載しています。

次に、併設型中高一貫校ですが２０ページを御覧ください。今後の方向について、前回まで当面新たな中高一貫教育校の設置は検討しないとしていましたが、今後の状況変化等も見ながら考えていく必要があると考え、３段落目では、県立中学校のさらなる設置について、当面必要性は低いと修正を加えています。

次に単位制について２６ページを御覧ください。今後の方向について、前回までは八代清流高校に限定した書きぶりとしていましたが、今後、他の県立高校に導入する可能性を鑑み、全日制高校についての記述に修正しました。これはＩＣＴを活用した遠隔授業を複数の高校で行う場合などには、単位制の高校の方が授業を共通化しやすいなど、様々なケースが考えられるため、時代のニーズに応じた単位制の導入について検討していく必要があるという文言を追加しています。

以上が、第１部の再編整備等基本計画の成果と課題についての説明です。

続きまして、第２部の県立高校のあり方と魅力づくりについてです。

第２部の構成については、中間報告として取りまとめましたＡ３資料の報告に沿った形で記述しています。ただし順番として、高校教育を取り巻く環境を最初に記載しています。

２９ページを御覧ください。高校教育を取り巻く環境について、まず社会の急激な変化の現状として、人口減少高齢化の進展や技術革新に伴う産業構造等の変化など、ア～オまでを記載しています。

３０ページには、その課題として、予測困難な状況が生じる中にあっても、諸課題の解決に貢献するとともに、未来を切り拓いて夢を実現していく力を育む必要があること、このため、新たな時代に対応した学科の設置について検討するとともに、探究的な学びを充実させていくことが望まれると記載しています。

３０ページの終わりから３１ページにかけまして、生徒の多様化について記載しています。高校に入学する生徒の能力、興味、進路等の多様化とともに、支援を要する生徒なども増えています。

３１ページですが、課題として、生徒一人一人の特性に応じた能力を伸ばすためには、例えば、少人数学級編制の検討や、通級による指導等のきめ細かな指導の充実を図る必要があると述べています。その他、３において地方創生に資する地域と連携した学校づくりの必要性。４では国の動向、県の方針について書いています。国の動向として、学習指導要領の改正について、また３２ページには、中央審議会での動きについて、さらに、今年度から拡充された、就学支援金制度について記述しています。特に３２ページの新しい時代の初等中等教育のあり方について、諮問の中で盛り込まれた、高校の特色化、魅力化に向けた方策として、設置者による、目指すべき学校像としてのスクール・ミッションの再定義や、高校による育成を目指す資質や能力を明確化したスクール・ポリシーの策定と公表、そして普通科教育について、学際的な学びや、地域社会に関する学びに重点的に取り組む学科など、特色、魅力ある学科の設置の可能化、その他、官学産が一体となって取り組む、地域産業を支える人材育成のための検討や、教育課程の開発実践、そしてＳＴＥＡＭ教育等教科横断的な学習の推進などを挙げています。

３２ページの最後には県の方針として、現在策定中の熊本県教育大綱について、３３ページには本年３月に策定予定の、第三期熊本教育振興基本プラン、いわゆる教育プランについて書いています。教育プランでは、夢を実現し、未来を作る熊本の人づくりを基本理念に掲げ、重点的に取り組む事項の一つとして、魅力ある学校づくりを掲げています。課題としては、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業改善や、社会に開かれた教育課程の実現に向けたカリキュラムマネジメントを推進していく必要があり、そのためにも、各高校がス

クール・ミッションを策定するとともに、スクール・ポリシーを策定公表し、一貫性のある体系的な教育活動を推進する必要があります。また、多様な学習ニーズに対応するため、普通科に特色・魅力ある学科を設置することについても研究していくことが望ましいと記載しています。

３４ページからは、再編整備後の県立高校の状況について述べています。

まず、定員割れの状況です。全国的な人口動態と同様に、本県においても、熊本都市圏への集中傾向が続き、それ以外の地域では減少が進み、このことは県立高校の充足率にも影響を及ぼし、本県は全国的にも充足率が低い状況です。令和２年度の定員割れは、平成１９年度の倍以上となっており、特に熊本市外の高校の充足率が低く、また学科・コース別に見ると農業科や体育関係のコースが低い傾向です。

３５ページを御覧ください。充足率が低下している高校における課題をあげています。入試倍率のデータが中学生の学力や学習意欲の低下に影響していると指摘があることや、受検者がほぼ全員入学している高校では、生徒間の学力差が大きくなり、入学後、習熟度別指導など多様な指導体制が求められていること、定員に対して入学者が少ないと開講科目が減るなど、教育課程の編成に支障が生じること、また、定員割れが続く高校では、学校の過小評価に繋がり、更なる定員割れを招いているとの指摘があること。こうしたことから、充足率改善に向けた取組みが求められ、充足率が低下している学科・コースについては、学科改編等も含めた魅力化を検討することは重要であると述べています。なお、充足率の改善を検討するうえでは、県下全域での募集定員のバランスについて改めて検討すべきであり、特に大規模校の学級減については、現段階では見送っているが一定数の中学校卒業者が熊本市内の高校に流れており、熊本市外の高校における定員割れの要因の一つになっていることは否定できない。このため、将来的に、今後の人口動態や中学生の進路希望等を十分研究しながら、募集定員については、県立高校のみならず、私立高校も含めて、適正なバランスとなるよう考えるとともに、地域の県立高校が進学の選択肢としてさらに、魅力的な学校となるよう絶えず取り組む必要があることも述べています。

３６ページから３８ページが少子化の下げ止まりの状況と、第１部の再編整備等基本計画の今後の方向をまとめたものを記載しています。なお、この部分に合わせまして、Ａ３資料の左上の記載を修正しています。

続きまして、３９ページから４２ページにかけては、７月から８月にかけて、中高生と保護者を対象に実施したアンケート調査結果の中から４つの項目を取り上げ、それぞれの項目で回答が多かったものを載せています。県立高校にあったら行きたいと思う学校や、高校の魅力・特色づくりのために重視すべき視点の項目では、高大連携や科学技術系の学科コース、情報化社会に対応した教

育など、ＩＣＴ環境の整備や、その効果的な活用、ニーズに対応した学科コースの設置検討の必要性を述べています。

４１、４２ページは進路選択時に参考とする情報源や体験入学で知りたいことについてです。学校の先生の話や保護者親戚の話を進路選択の際の情報源として、体験入学では、学校の雰囲気のほか保護者では進学、就職の実績を知りたいとの答えが多いことから、今後、中学生や保護者、中学校の先生方の関心に応える情報発信に取り組む必要性を述べています。

４３ページには、本県の今後の魅力化にあたっての考え方や、魅力ある学校づくりの理念となるものを書いています。枠囲みの中で、高校教育が求められるニーズが変化、多様化している中、中学校卒業者数が下げ止まっている状況を踏まえ、この４年間は再編統合でなく、新しい時代に対応した全ての高校生が夢に挑戦できる魅力ある県立高校を実現するための取組みを推進していくことが求められるという基本的な考え方を述べています。

枠囲みの下から４５ページにかけては、魅力ある学校づくりの基本的な理念の部分となっています。これまで説明してきた現状や課題を踏まえ、今後は課題を発見し、解決策を見いだすために考え抜く力を育むことが一層求められていること、これからの魅力ある県立高校づくりのためには、学科等のあり方や探究的な学びの充実などの教育の更なる改革とともに、新しい先端的な学びの導入や、従来の学科・コースにとらわれない選択幅の広い柔軟なカリキュラム、文系・理系にとらわれないＳＴＥＡＭ教育などの新しい学びのスタイルの充実について検討すべきであること、多様な生徒への対応が求められており、限られた教員配置でこのことを実現するためには、ＩＣＴを効果的に活用することが不可欠であること、県立高校が、地域や社会を支える人材を育成するためには、地域と一体となって高校を支える仕組みづくりや、地域の中で、地域とともに学ぶ教育に取り組んでいく必要があること、その他、県立高校が選ばれる学校となるためには学校の特色化、すなわちスクールミッションの明確化とともに、常日頃から地域と連携した学校づくりに努め、求められる情報を中学生や保護者、中学校教員等の直接的な関係者はもとより、広く県民に対して効果的に発信することが不可欠であること、県立高校が相互連携を深めることで、各学校の特色や強みを生かすことなどを書いています。

４５ページには、このような取組みを通して本県の生徒達が学びを広げ、深めることにより、それぞれの未来への扉を開いてもらいたいと締めくくっています。

４６ページから４９ページにかけて、三つの県立高校像について説明しています。基本的にはこれまでの検討会で御説明してきた内容を書いていますが、追加して申し上げますと、４８ページの中段、学校の施設設備の充実の２つ目

に専門高校の実習設備について触れています。新学習指導要領では、加速度的な産業社会の変化に対応した最先端の産業教育設備を使用した授業が求められており、今後は国の交付金等も活用しながら、最先端の装置への更新を図ることの重要性をあげています。

また、４９ページの教職員の資質向上、効果的な人員配置のところでは、新学習指導要領に示された教育課程や学びの実現に向けた研修とともに、学力向上、働き方改革の推進、ＩＣＴの活用、地域との連携等に関する研修内容の充実が求められること、また、専門高校の企業での研修や、産業界から人材を招いての研修など専門性向上のための支援の充実、さらには、様々な学びを充実させるための教職員の適正配置や外部人材の活用にも触れています。

そして、最後の各種制度や仕組みの整備のところでは、入試制度が中学生の進路選択に与える影響が大きいことから、有識者等から広く意見を聴取しながら、現状に応じた入試制度のあり方について検討する必要性を述べています。また、前回の検討会でも御意見があった、高校の魅力化の大きな要素である部活動の活性化を図るため、例えばスポーツ推薦枠等の検討の必要性にも触れています。

５０ページを御覧ください。魅力ある高校づくりに向けた７つの取組みの方向性について説明しています。方向性については、これまでの会議で御説明してきた内容と基本的には変わりませんが、新たに追加した部分を説明させていただきます。

５０ページの「（１）各学校の特色や強みを生かした取組を重点的に推進」ですが、中頃の「また」から始まる文章をご覧ください。

今後、生徒の進路希望や夢の実現、さらには、社会の要請や地域のニーズ等に応えるため、学科改編等による魅力化の取組みと併せ、１学級４０人以上の定員割れが一定期間継続している学校においては学校規模やこれまでの学級減の取組み状況を踏まえ、学級減による定員割れの改善を図ることも重要であるということを記述しております。これは、先ほど３５ページで述べました充足率の低下による課題を踏まえ、魅力化と一体的に進める事で学級減によって充足率の改善を図るという趣旨です。

次に、５２ページを御覧ください。小規模な学校の活性化の中に少人数学級編制に触れております。小規模校の場合は、事実上は少人数となっている場合が多いのですが、学級数が減ると、教員配置数が少なくなるため、多様な学習ニーズに応じることが難しくなります。そのため、例えば１学級の定員を少なくすることで学級数を維持し、教員数を確保し、多様な学習ニーズに応じた指導が可能となります。ただその一方で、配置が必要な教員数の増加で、財政負担の問題が生じるため、少人数学級編制につきましては、本県の事情等踏まえ

て検討していくという記載にしています。
　最後に、（７）取組みを推進するための環境整備の部分です。５３ページになりますが、生徒募集活動における情報発信の部分で、特に中学校の教員に各学校の特色や魅力を理解してもらうため、日常的に中学校との連携を強化することの必要性を入れております。
　５４ページから５８ページは、１４の取組みがあるのですが内容につきましては、これまでも説明していますので説明を省かせていただきます。
　５９ページを御覧ください。提言の締め括りとして「おわりに」を記述しております。ここでは高校の魅力化、教育の充実を図る上での留意点を２つあげております。
　１つ目が、高い資質と能力、熱意をもった教員の確保です。各高校の教育活動を支える教員が十分に能力を発揮するための体制と環境づくりが求められるということ。
　２つ目が、県立高校が各地域において魅力ある教育機関として存続していくため、学校だけではなく地元市長や企業等様々なパートナーとの連携・協働していくことが必要であること。
　長くなりましたが、以上で提言の素案の説明を終わります。委員の方々の忌憚のない御意見をよろしくお願いします。

【半藤会長】
　ありがとうございました。たたき台を基に、これまでの議論を整理し、反映していただいた提言案について、変更点等を中心に御説明いただきました。中教審の答申についても注目したいところが多々ありますが、本提言案については、目を通しますと、現在考えられる、ほぼあらゆることが盛り込まれていると感じます。大切なことは、それをどのようにどのような順位で実行していくのかということかと思いますが、委員の方々からいろいろ御意見いただきながら、詰めを行って参りたいと思っています。
　それでは先ほど申しましたとおり、まずは委員各位に感想、あるいは、今の事務局からの説明に対するさらなる御質問等、御自由に御発言いただきながら、それらを糸口、論点として、更に議論を進めて参りたいと思います。それでは早速で恐縮ですが、田中委員、口火を切っていただけますでしょうか。

【田中委員】
　御説明ありがとうございました。私から２点、第１部と第２部について、それぞれ一つずつお話を聞きたいと思います。
　第１部については、私は門外漢なので、なかなかよく分かっていませんが、

子どもたちのニーズは十分に拾われていると思いますが、先生のニーズがどれだけ拾われているかが気になります。まちづくりの視点で話すと、子どもが自分の夢を見つけるときに、地域に、憧れるかっこ良い大人がいるかどうかです。やはり子どもにとって、身近な大人は先生になるので、高校で働いていることが楽しいと思える先生の職場をつくることが、子どもたちにとっては一番良いのではないかなと感じ、先生方のやりがいも汲み取っていく必要があるのではないかと考えます。それがどのように反映されていますかというのが、御質問になります。

２つ目が、第２部で、県立高校の未来を考える、すばらしいアイデアが入っていると思います。今やっぱりＳＤＧs などの面でも、サスティナブルということが言われると思いますが、そのサスティナブルをどの単位で考えるかということです。なかなか考えにくいことなのですが、ちょっと大きく１００年、考えてみましょう。通常、１０年や２０年は都市計画等でありうるわけですが、１００年と考えたときに、ひょっとしたら自治体等は合併してなくなってしまうかもしれないけれども、その時に可能性があるのは、高校はあり続けるのではないかなということです。熊本県下の高校で創立１００年を超える高校はあると思います。だから自治体は合併してなくなってしまっても、高校は校風としてちゃんと歴史と文化などを継承していけるのではないかなと考えます。つまり、サスティナブルということを考えたときに、自治体と高校の連携はなかなか難しいのですが、小中学校は自治体の教育委員会で行い、県立の高校では、例えば海士町の例など、後で奥田委員に教えてもらって良いのかもしれませんが、今コミュニティ・スクール等でやっている連携の時に、自治体と高校がいかに協働するか、それを先生方に言うことは酷なのかもしれませんが、是非、県教育委員会としては、それを考えていただくと良いのではないかなと思いました。

何故そういうことを申し上げるかというと、まちづくりで一番困るのは、担当の方が２、３年で代わっていくことが往々にしてあって、皆さんの働き方もそうなっているかと思います。先生も場合によっては、異動していくのですが、生徒たちは毎学年変わっていっても、生徒の間で校風として受け継がれ、少なくとも、中学校までは地元の中学校に行っているという仮定で、先ほどから中高連携という話もありましたが、そういう意味で、地域づくりの担い手として、高校生に期待されるのは、ひょっとしたら大人ができないことを高校生がやってくれる可能性があると私たちは期待していまして、そういう意味で、このサスティナブルというのを担うためには、私個人は２番の「地域で夢を拡げ地域の未来を支える人材を育てる学校」という中で、是非、自治体の皆さんと、地方創生でも少子高齢化でも良いのですが、そういう対策について高校生もしく

は先生と高校生のペアのような形で、地域に根差した政策案を検討していただけたら良いなという意見になります。以上２点です。

【半藤会長】
○ありがとうございます。事務局、お答えいただけることがありましたらお願いします。

【事務局】
○委員がおっしゃいました１点目の先生のニーズをどうやって拾っていくのかという点ですが、１つは、校長先生方にアンケート等でニーズをお聞きしています。また専門高校につきましては、ワーキングを昨年度実施し、それぞれの分野の先生方に集まっていただいて意見交換させていただいています。

【半藤会長】
○たしかに、魅力ある県立高校づくりに、教員の積極性や主体的な関わりは欠かせないところでありますので、そのあたりも十分踏まえた、または配慮した提言が必要だろうと思います。御名前が出ましたところで、奥田委員、お気づきの点あるいは提言案について何か御感想等ありましたらお願いします。

【奥田委員】
○提言のとりまとめ、ありがとうございます。さきほどの話の関連で言うと、地域で夢を拡げ、地域の未来を支える人材を育てる学校として、スクール・ポリシーやスクール・ミッションを考えていくときに、学校だけではなくて、自治体や地域の関係者の意見も踏まえて一緒に考えていくことが重要ではないかと考えています。「魅力ある学校づくりに向けた取組の方向性」の中に記載がある、学校の特色を生かした取組や、地域の期待に応える魅力ある学校づくり等に関しても、地域等関係者のニーズや期待に応えることと、生徒が地域で何を学び、どう成長できるのかということを一体的に考えていくということが大切なのではないかなと思います。
　今回の大きいテーマにもなっている夢に挑戦するということに関しても、やはり学校の中で学んでいるだけではその夢が見えてきません。最近、夢を持てない子どもが多いという話も各調査等でも言われていますが、夢を持つうえでも、多様な大人との接点、先生が一番身近なのですが、それ以外の地域社会の大人等との関わり、もしくは実社会での体験等が大事になってくるのではないかと思っています。こういう予測不可能な時代だからこそ、実社会での経験をもとに、自分たちがどういう地域社会を作っていきたいかという未来を描く力

も必要なのではないでしょうか。そうして、地方創生に資する学校づくり（高校生が地域の担い手になるという視点）と生徒自身の未来を切り拓く力を育むという両面を実現するためにも、今回盛り込んでいただいている地域社会との連携が具体的に推進できるよう、是非力を入れて取り組んでいただきたいです。

もう一点が、地方創生に関連して関係人口等の観点で考えたときに、ここにはあまり大きく書かれていないのですが、矢部高校が取り組まれているような、県外からの生徒の入学を募集するということも必要になってくると思っています。定員を満たすという数の面だけではなく、地域外から来た生徒がいることによって、地元の生徒たちも地域の価値を再発見したり、新たな気付きを得たりするなど生徒の学びにとっても価値があることが、これまでの各学校の取組みの中でも見えてきています。そういった視点も持っていただけると良いのではないかと思います。

【半藤会長】
○今、御発言にありました高校と地域との関わりについては、これまでにも御議論いただきましたし、提言案にも相当程度、意識した書きぶりにはなっていると思いますが、今のような御意見も踏まえて文言等についても最終答申に向けてしっかりと練っていきたいと思います。それでは続きまして、足立委員、お願いします。

【足立委員】
○すばらしい答申案ができて驚いております。これだけよくまとめたなと思っています。なかでも私と関わりがあることが、「ＩＣＴ教育日本一」という目標を掲げていただいたことは大変ありがたく思います。ただ、これがどういうものなのか、御説明を聞いただけでは、理解できませんでした。

例えば、３１ページの課題で、多様な生徒が入学するというまさにダイバーシティ、さっき経済の話もあったのですが、精神障がいを持った方等いろいろ書いてあります。こういう方々が一人一人の能力を伸ばすには、ＩＣＴは絶対必要だと思います。最近のリモート教育では、大体評価されているようですので、例えばこういうところにもＩＣＴ等の文言が入ってくれば、こういうことがＩＣＴ教育日本一という話になるのではないかなと思っております。何かそういう視点で、もう一度見ていただくと、先ほどありました学校の先生方も、これからＩＣＴでやっていくのだなという話につながっていくのではないかなと思いましたので、是非、ＩＣＴ教育日本一の高い錦の御旗を現実のものにしていただきたいと思います。

それから、ここでハードウェアと言いますか、環境整備だけという話が出て

いるのですが、社会のニーズに従ってとなると、例えばサイバーセキュリティというのは最近ものすごく重要な要素になってきているわけですが、そういったものも高校生に対して植え付けていくというような話になると思います。またこのＩＣＴ教育日本一の中に、学校の生徒さんだけではなくて、地域社会との連携として、以前申し上げたと思いますけど、これからデジタル社会がどんどん発展し、デジタル庁でも誰１人取り残さないと政府が言っているように、そういう意味では、リカレント教育の拠点に各高校がなるのではないか、それだけのＩＣＴを装備した学校で、または若い方の頭脳でそういった地域の人達がデジタル社会に対して対応していけるように、何かお互いに手を組んでやっていこうというようなことにでもなれば、もっと良いのではないか、地域社会の人もこの高校は良いぞ、世の中の先端を行っているという感じになっていくのではないかと思います。是非、ＩＣＴ教育日本一を、深くまた広げていただくような形に、いずれはしていただければと思います。

【半藤会長】
○御要望等をいただいたと理解しております。バーチャル空間を活用した教育が進むと、学びの方法が相当変わるだろうと思います。その意味で、未知の部分がありますが、今後大きく可能性を開くような答申になれば、つまり、答申案から教育への期待が感じ取れるものになれば、これからを見据えたものになろうかなと思いますので、足立委員にも教えていただきながら可能な限り反映させていければと思います。
　それでは、小多委員お願いします。

【小多委員】
○全体を御説明いただいて、まずは今の社会や時代を反映した、その上で必要とされる今からの教育というものがきちんと盛り込まれている内容だと、非常に期待をしたい内容になっていると思います。
　田中委員もおっしゃったところなのですが、全体を見通すと、いわゆる高校とその地域と考えた時に、中学校との連携は、かなり繰り返し強調されて記述があるのですが、地元自治体あるいは自治体を構成する様々なところとの関係性について、これまでも高校のあり方の課題であった、地域との関係性という点は非常に大きいなと、私もこの立場で取材している中で感じるところです。全国的にそういった例で、うまくいっていると言われるところの多くは、おそらく地元自治体との関係性がバックとしてあるのだと理解しています。最後の「おわりに」のページで、その点は当然、県教育委員会できちんと触れておられるのかなと思ったのですが、全体の印象としてはそのあたりは弱いのではな

いかなと率直に思いました。

もう一点ですが、まずは担い手となられる先生方についてです。これだけの時代に即した、もしかすると今まで先生方が積み上げてこられた教育のノウハウや技術的なもの等が、ある意味ではごっそり変えないといけないような変革の中にも立たれる先生方の、労働者というか先生方の働きがい等、先生方の長時間労働云々の問題も言われて久しいですが、やはり先生方がこれを推進する核となられることを組織として、県教育委員会として、県として、自治体として、支える基盤もちゃんと作り、明確にしますということを、例えば人員の体制等ではある意味踏み込んで記載しておられると思うのです。学級編制のところで、人数を絞って学級を維持し、何とか先生の体制をキープしようという思いが十分伝わってきます。その点を含めた先生方の働き甲斐、先生方が生きていく上で本当に教育により取り組んでいただけることを担保していただくような文言がもう少し明確にあったら嬉しいなと思います。

もう一点、具体的なところで言いますと、熊本市内の大規模校の話なのですが、この場で当初からこだわって発言させていただいていますが、私立学校も含めて、その協議を継続していく必要性があるという記述があると思うのですが、やはりそこはある種の縦割りの組織の中のそれぞれではなくて、熊本の高校教育等を担うそれぞれというところで、更に踏み込んだというか、現実的な検討をする場が、もしかしたらこの４年の間に必要になるのではないかと個人的には思います。

最後ですが、冒頭半藤会長からもあったのですが、この変化する時代において、例えばコロナの問題等で起こる現象面にどうしてもとらわれがちなのですが、どう生きるかというのが本当に何か突きつけられているような感覚があります。このプラン全体を見ると、印象としてはいわゆる人材・働き手・社会の担い手としての人を育てるという意味の時代をとらえたものになっていると思うのですが、人としてのニュアンスというか、もう一つ踏み込んだ表現から感じられるようなところが、もう少しあっても良いのではないかと思います。具体的に言うと、例えばＩＣＴ等や情報化教育というところが重ねて記述してありますが、生徒及び保護者の方々へのアンケートで、高校の魅力化の重視すべき視点として、情報化社会に対応した教育という内容で、非常に多くの御意見があったという御報告でしたが、技術的なところの内容をきちんと身に付けていって欲しいというのはもちろんだと思うのですが、昨今言われていることが、飛び交う情報をどう見極めて、どう自分のものとして適切な判断につなげていくか、最近の話題としてもアメリカの分断等々の報道を聞くと、まさに情報というのが、非常に深刻な社会状況を生んでいるなと感じます。個別なところでは生徒のいじめの問題等も含めて、どう情報をどう読み解いて、どう噛み砕い

ていくかという教育の場づくりということに、大きな視点での構えがあるというのも、可能であれば示していただきたいと思います。そういう意味では、全体としてどう見るか、まさにそのところで夢ということが１つキーワードにあると思います。実際はどうなのでしょうか。理想的には、子どもが自分の将来や何らかの未来を描いて、それを実現するための道を歩んでいくことを教育の場でサポートしていくということかと思うのですが、大半の大人は思い描いた夢どおりに生きている人なんて、そんなに多くないのではないかと思います。でも、生きていく価値を見出して、その夢というものを自分なりに少しずつ捉えながら、壁があっても挫折しても、生きていく力という意味での捉え方が、一本道の夢を実現するための、非常に理想的な道標的な感じがします。ただ、これを否定するわけではないですが、そうではない社会の現実というところを捉えた時の、夢を更にその先を見通す力は、私はこの立場でいろいろ世の中を見ている限りではとても必要だなと感じます。以前もこの場で御報告したかもしれませんが、防災教育のことについて、全国の高校生の方々が学ばれる、阿蘇であった合宿に参加したのですが、参加している生徒にものすごく意欲があり、地域のために防災を仕事として頑張りますという、ものすごい夢を語られ、でもちょっと待ってくださいと。そこに来られた防災教育のエキスパート、全国的なエキスパートと言われる先生方で、若い頃に、今、防災教育を専門として生徒さんたちを前に、この場で語っていることをイメージしていた人はどなたもいらっしゃいませんでした。それぞれが東北あるいは阪神で被災をして、そこで大きく運命が変わって今があり、でもそれがとてもすごい生き方でらっしゃるという、そういったものがいろいろ世の中に溢れているというところも含めて、まさに今からの時代を生きていく若い方々の後押しになるようなメッセージ性も感じられるような提言になれば、これまた理想的だなという意見です。

【半藤会長】
〇幅広く深いお話をいただいたと思います。問わず語りで余計なことを言えば、いわゆる民主主義国家を標榜している世界各国で一向にコロナが収まらない一方、自由の制限がかなり厳しい中国では、その問題は解決しているとなると、このコロナの状況で言えば、民主主義国家よりも統制の強い国のあり方のほうが理想であると中国はお思いになるだろうと思いますね。民主主義は、感染症に対して無防備であるということを見せつけている気すらします。すなわち、それが民主主義かということです。私ども民主主義を学んできていますが、そのことを大切だと思い、それがどういうことなのかを理解しているか、そういう観点では教育のコンテンツのようなものは方法論と併せてまだまだ見落とし

てきたのではないか。見ないようにしてきたのかもしれませんが、真剣に議論すべき問題はまだまだたくさんあるのではないかという気すらします。いろいろ御意見等いただきましたが、事務局、何かコメント等ございましたら、お願いしてよろしいですか。

例えば中高の連携、私も極めて重要だと思っています。義務教育は市町村で、ここは県立高校のお話だということになっていますので、いろいろ難しいことがあるのか、現状で中学、高校の連携がどれほど進んでいるのか、私もはっきりと見えていないところがありますが、中高一貫校に勤めていた経験からすると、中学、高校の両方を教えるのは非常にためになりますね。中１も教え、高３も教えることは教員にとって大変勉強になりますし、また力もつきます。若い時ほど、そういう経験を積んでおくと、教師の成長の幅が相当違うのではないかと思うところもありまして、そういった観点からの改革や提言も非常に重要なのかなという気もします。何か事務局よろしいですか。

【事務局】
○小多委員そして先ほど田中委員からもお話がありましたように、地元の中学校だけではなくて、地元自治体との関係性ということは本当に大きいものがあるというお話をいただきました。事務局としましても、本当にこれから社会が変わっていく中で、その重要性はますます増してくるのだろうと考えております。従いまして、学校としましては、地元の中での立ち位置であったり、あるいはその市町の首長様と様々な意見交換をしながら、首長が県立学校に期待するものを、学校と自治体が共有しながら進んでいくことが重要になっていくと考えております。貴重な御意見をありがとうございました。

【半藤会長】
○今回の提言の中にもプラットフォームづくりについては盛り込んでいただいておりますが、これをいかに有効活用していくかが大切になってくるかと思います。橋口委員お願いできますか。

【橋口委員】
○一点だけ意見を述べさせていただきたいと思います。

昨年熊本で発生した、令和２年７月豪雨におきまして、学校に通学することが厳しくなった学生もいます。現在は通学支援などを県で行っていますが、そういった中でも通学する手段がバスで一日一本しかないという現状もあるかと思います。通学が困難であるのならば、熊本市内の学校に入学しようと考える生徒がいるという話も聞いています。また、寮があったら入れたのにという意

見もございます。ぜひ寮のあり方について、議論をしていけたらいいのではないかと思っています。

【半藤会長】
○そのあたりは、提言の中での想定は薄いところかと思いますけども、事務局何かお考えがありましたらお願いします。通学の利便性等或いは不都合さを解決するための観点も必要ではないかということかと思いますが、いかがでしょうか。

【事務局】
○今お話いただきましたように、７月豪雨により、高校生だけではないと思うのですが、球磨川鉄道、そして肥薩おれんじ鉄道、肥薩線など、通学の足ということでかなりの影響を受け、現在もなお、災害前と同じような状況ではない形で、通学している高校生が多数いると認識しております。そういう中で、通学手段の確保は必要であり、今お話がありましたように、通学手段に制約が出ることによって、本来であれば、地元に残りたいという生徒が他の地域へ行ってしまうような事態は、避けないといけないのではないかと考えます。その方法の一つとして、寮も重要な役割を果たすのではないかと認識していますので、この御意見については事務局としてもしっかりと考えさせていただきたいと思っています。

【半藤会長】
○今後は、学校単体ではなくて、チームで教育を支えていくという観点が必要だと思います。災害で学びの場がクローズしている時に、再開を待つのか、或いは他校が受け入れて、なるべく学びの停滞が起こらないような、周辺地域を巻き込んだ体制、教育の体系性みたいなものは作れないのか。そのあたりは災害がこれからも続くであろう中において、検討が必要なことかもしれません。事務局でも検討いただけるということでしたので、今後課題としたいと思います。

【吉永委員】
○町村教育長会の代表の吉永です。立場上、郡部に住んでおりますので、そういったことを踏まえながら、発言をさせていただきたいと思います。
　提言案につきましては、中教審の答申を踏まえた内容になっているので、よく考えられているなという感想です。３点ほどお話したいと思います。
　私は地域に住んでいるので、地域の中学の様子や、そこにある高校の様子も

よく分かります。地域の中学校の校長と話をすると、今まさに私立高校の受験の時期なのですが、例年通りといいますか、やはり以前よりも私立高校の希望者が多いという話です。その流れはこれからも変わらないのではないかなと思います。就学支援金その他の影響も多分あるだろうと思います。

では、そういった子供たちを地元の高校に引きつけていく魅力とは何かということで、２点目なのですが、提言の中にもありますように、県立高校の特色とか強みを、小規模校であっても作っていけば、そこに目を向けるような子どもたち、もしくは親が出てくるのだろうと思います。しかし、残念ながらそこが弱いが故に、もっと遠くても、市内の高校を目指しているということが現状だろうと思います。よって、その強み、弱みはどのようにして作るかというと、当事者の努力だけではなく、何らかの手当が必要かなと思います。私の町では小中学校の特色を出すために、学校に努力してくださいと言うだけではなくて、予算をつけています。しかし、それでも特色を強く打ち出すことはなかなか難しいです。どこでも似たようなことをやっているので、それ以上のことをやろうというと、やはり人材や予算が必要な面もあるかなと思っています。高校でもそういった努力をされていると思いますが、５０ページの取組みの方向性にある小規模な学校の活性化ということが、せっかく挙げてありますから、それに繋げるためにも、関係者全員で知恵を出し合うことが必要かと思います。

３点目は、方向性の一番最後に環境整備があります。発言された方々の話の中でもＩＣＴのことが多くありましたが、義務制でも１人１台をすでに導入していますし、県立高校も今後導入されると思いますので、それを活かしていく必要があります。しかし、誰もが考えることなのですが、それを使いこなして子どもに指導する教員の指導力を上げることも、本当に大きな課題です。機械だけあってもなかなかうまくは活用できません。研修を実施するとかいろいろなことを行っていくことが必要だろうと今強く思っています。

また、県立の教育職員で５０歳以上の教員がここ１０年で退職しますが、教員の中の約半分近くを占めているのではないかと思います。その人々が退職をしていくここ１０年が、非常に大事な１０年間になると思います。退職するということは、同時に若い教員が入ってくるということですので、若い人も同時に育てていくことをやらないと教員の人材不足になり、子どもに一番影響を与える教員の資質向上にも目を向ける必要があるのではないかと思いまず。

【半藤会長】
〇では末次委員、お願いできますか。

【末次委員】
○まず１９ページにありました、中高一貫校の件ですが、課題の中に、受検者数が低下傾向にあると記載があります。その原因は自ずと知れたことで、生徒数の減ということだと思うのですが、単純にそれだけなのか、それとも、今考えている魅力ある高校という視点から考えた時に、この課題はそれに合致とするところが何かあるのかどうか、今後の方向の中に、当面は新設の必要性は低いと考えるという文言がございましたので、そのことが一点です。

また、先ほど足立委員からもありましたが、３１ページの多様性についてです。生徒の多様化ということで書いてありますが、本当にこれは義務教育でも言えることであり、小中高と繋がっていく段階で、非常に大切な部分ではないかと思うのですが、その割には、もう少し具体的に主な取り組みを明記して欲しいと感じたところです。

意見としましては、たくさんのことをこのようにまとめてありますので、一つずつ積み上げながら、今後のあり方と魅力づくりに向けて、皆で頑張っていければと思います。近年、地域との連携が非常にクローズアップされ、地域との連携も必要と考えますが、義務教育との連携も非常に大切ではないかと考えます。中学と高校だけではなく、小学生が高校生や高校を見て、かっこいいなとか魅力があるなとか、あんな高校生になりたいなということに繋がるような部分も必要だと思いますし、今地元で見ている範囲でも、小学校と高校の連携もかなりしておられますから、高校からの働きかけというのは、本当にありがたいと思っているところです。地域と繋がるということもしかりで、地域を見て、そして実際に一緒に行動を共にしてできることはたくさんあるかと思いますし、地元の高校を大事にしたいという地域の方の強い思いもあると思います。提言にある「学んでひらく夢へのとびら」という文言は、とても素敵な言葉だと思います。ぜひ一歩ずつ近づけるように、４年間という制限がございますが、頑張っていければと感じたところです。

【半藤会長】
○文部科学省の方とお話をした時に、地方で小中高が一つの校舎で一緒に教育をするといった、そういう学校を作ることはできないのか、いろんなメリットがあるのではないかと聞いてみたら、「法改正が必要かもしれないが、できるのではないか。」と言っていました。そういう声や、やる気があれば、これまでは不可能だと思われていたことも、これからは変わっていくかもしれません。今、御質問がございましたので、この点については事務局にお答えいただければと思います。

【事務局】
○一点目の県立中学校の受検者数、倍率が低下傾向にあるというところで、人口減の要因ももちろん大きいと思うのですが、もう一つは例えば、熊本市内の高校が選ばれている場合もあるかと思います。もう一つは、なかなか県立中学校の情報発信がうまくいかず、ひょっとしたら学校の良さが伝わってない部分もあるのかもしれません。この点については、もう少し詳細に分析してみなければ、明確にお答えすることは厳しいかなと思います。
　二点目の多様性のところですが、委員がおっしゃる通り、義務教育でもまた一緒だと思うのですが、もう少し工夫して、詳細に、内容がもう少し分かるようにしたいと思います。

【半藤会長】
○それでは、内村委員お願いできますか。

【内村委員】
○私は私立学校の立場として参加しておりますので、肩身の狭い思いをしております。実はこの魅力化は、私立学校では常に考えていることなのです。それ次第で受験生が来るかどうかが大変な問題で、もし定員割れをしていったら、経営の問題になってきますので、どうやって魅力を出すか必死さがあります。根本的には、スクール・ポリシーなどの言葉が出てきていますが、私立学校には「建学の精神」という言い方をしていて、それを何回も見直し、今に翻訳をするということはよくやっています。私の学校でも創立９６年ぐらいで、９６年前と今とはやはり時代も違い、当然「建学の精神」を変えていかなければいけないわけです。私たちはそれをどう翻訳していくかということを常に考えています。入学してきた生徒の満足度が高くなければ、それは口コミで後輩などに伝わり、生徒募集に影響が出る。口コミは一番大きな力を持っていると思います。では、満足度って何だろうか考えると、もしそれを言葉で表すとすれば、一つは、居場所になっているかどうか。それはクラスでもいいし、クラブでもいいし、学校でもいい。もう一つは出番があるかどうか。その役割、出番がその生徒にあるかどうか。それが与えられて、また一つ将来の見通しがついていけば非常に大きな力になり、生徒にわくわく感が多分出てくるはずです。そういうものをどうやって持たせていくか、持たせていく方法として一番大きなものは、もちろんシステムの問題とか、教育課程、カリキュラムの問題等ありますが、１番はやはり教師だと思っています。教師がどれだけ、きっかけを与えるか、教師自身の人格的なものも含めてです。私立学校では、特に何役も仕事があり大変なのですが、期待していることは、使命感を持って欲しいというこ

とだけです。何のためにここで教師をしているのか、将来の社会を支える人材をつくるのだ、育てるのだという使命感を持つのだということを、いつも私は言っています。その使命感がなくならないように、絶えず研修を繰り返しながら持たせていくことをやったり、新しい時代にマッチするいろいろな情報を研修で取り入れたりします。私立学校の場合は全県一区でもないし、他県からも生徒は来ます。一番理想とすることは、他県に住む卒業生が自分の子どもを母校に送ってくれることです。そういう生徒が一番、学校を評価してくれているわけで、それは私学にとって生命線だろうと実は思っています。そういう意味合いが、もし郡部の学校の中でも、先生たちが生き甲斐ややり甲斐を持ちながら、使命感を持ちながらやっていく必要があると考えます。そのような取組みは小さな私立学校でもできているわけですから、できないことはないだろうと思っています。

ただ私は、熊本西高校に視察に行った中で言われたことですが、どうしても教師の仕事はいろいろなことが出てくるから、なかなか全体を見通せない、新しいものに飛びつくことはできないので、やはりコーディネーター的な先生が必要だということです。或いはそういう役割をする外部人材が配置されることは、とても学校にとって大事だろうと思っています。今、私の学校でも、そういう人の配置を考えています。それによって、例えば地域との町おこしのようなことを、うちの学校では黒髪地区とのまちおこしみたいなことが、動いていただいている中で出てくるのです。これは私たち教師では簡単に、時間的な意味も含めてできません。財政的な問題ももちろんありますが、それを割り引いて、その辺のところ考えていただくともっと活性化できるのではないでしょうか。

【半藤会長】

○公立、私立の区別ではなくて、魅力ある学校づくりについて考え方は一緒ということで、お互いの良いところを敬重し合いながら、理想的な学校づくりを進めていくことが大事だと思います。大学でどんどんオンラインを使った教育が盛んになっていくと、今後の見込みとして言われていることは、オンラインによるコンテンツがどんどん充実していけば、教室で教える教師が必要なくなるということです。しかし、画面で学んだ後のアフターケアやそこでいろいろ起こってきた疑問について、そのまま放置せず、次への学習へつなげるためのチュータリングといいましょうか、ものを教える先生ではなく、学び方を指導する指導者、チューターのようなものが、これまでよりも必要になってくるだろうと言われています。高校でもＩＣＴ教育がどんどん進んでいくと、先生はもちろん必要でしょうけれども、もしかしたら、それとは違った役割の指導者

のような方が必要になってくる時代が来るのではないかと思います。

【音光寺委員】
○今、実際に生徒が受検している時期なので大変興味深いデータが、３４ページの県立高校の定員の充足率及び定員割れの状況というところに、年々充足率が下がっていっていることが掲載されています。私も県北学区の学校に在籍していますが、充足率が非常に低くなっているということを危惧しているところです。そこで質問ですが、５０ページに「１学級（４０人）以上の定員割れが一定期間継続している学校においては、学校規模やこれまでの学級減の取組みを踏まえて、学級減等による定員割れの改善を図ることも重要である」と書いてありますが、実際の定員割れの状況を具体的に教えていただければと思います。

【半藤会長】
○御質問で分かる範囲でお答えいただければと思います。

【事務局】
○今の定員割れの状況ですが、今年度の４月時点ですが、分校含む５０校のうち、４０人以上の定員割れが３年以上継続しているという学校が１８校あります。そのうち１４校については、５年以上継続して定員割れをしている状況です。ちなみに、その５年以上定員割れが継続している学校の学校規模は、７学級が３校、６学級が２校、５学級が２校、４学級が３校、３学級が４校という状況です。地域別では、県北学区が６校、県央学区が３校、県南学区が５校という状況です。

【音光寺委員】
○実際、どれくらいの期間継続したら学級減にするのか。郡部は人口も減少しており、それに見合っている募集人員なのかというところも危惧しています。熊日新聞に掲載されている、今年度の前期選抜の倍率などを見た時に、はっきり言って中学校からすれば、こんなに少ないのかと感じます。倍率が低くなると、提言案に書いてありますように、子どもたちの学習意欲にも関係してくるのではないかと思います。やはりその辺をある程度考えられて、募集定員を見直していただきたいと思います。ただし先ほど説明があったように、大きい学校とまた小さい学校では状況が違うと思うので、ただ単に、例えば３学級のような小規模な学校の学級を減らされると、科目選択ができなくなるような状況が出てくるところもあると思います。ある程度の規模のところについては、例

えば５年とか、７年定員割れが続いているところであれば、募集定員を減らすというようなことも考慮された方がよろしいかと思いますが、御意見をお聞かせいただきたいのですが。

【半藤会長】
○これまで、この会では市内の大規模校の学級数の問題はいろいろご意見が出ていましたが、定員割れが相当程度長く続く学校についての学級数の問題は、議論してきませんでした。今の御発言はそういうことも考えるべきではないかということだと思います。事務局には、いろいろなデータがあるということですと、データに基づいた議論も可能なのかなと思いますが、県としての何かお考えなのでしょうか。

【事務局】
○今、音光寺委員からありました、小規模校から中規模校まで、学級数が多い学校もあり、事務局としては、今回最初の適正規模のところで少し申し上げたのですが、今までは適正規模は４学級以上が望ましいということで捉えてありましたが、実際既に３学級以下の小規模校が１０校もあることが一つあります。また、小規模校でも、今後ＩＣＴの活用等をすれば、ある程度十分な教育環境が確保できるということで、今回提言の中では、適正規模の考え方については一旦留保させていただくという整理にさせていただいています。このことから言いますと、例えば、今現在３学級以下の小規模校については、事務局としては当然、統合再編もやりませんし、学級減についても実施はしないという考えで、魅力化に重点的に取り組んでいくという考えです。

【音光寺委員】
○別件でいいですか。先ほどから中高との連携ということが話題になっておりますが、本当に一番大事だと思います。やはり、小中高まで連携した教育をしていかなければいけないと思うのですが、３３ページにある、熊本県の教育振興基本計画の基本理念に「夢を実現し未来をつくる熊本の人づくり」という、すばらしい理念がありますが、夢を実現するためには、小学校、中学校、高校と発達段階に応じて指導していく必要があると思います。今、現実的に、県立高校と公立の中学校が一緒になって実施している施策はありません。だから先ほど田中委員がおっしゃっているような、地域に貢献することにしても、例えば、地域に貢献する方法も、小学校、中学校、高校と、その発達段階によって貢献する方法がそれぞれあると思います。ただ、発達段階に応じてその地域と関わりを持っていくことが繋がっていけば、地域の人にも「高校生がこんなに

育って、あの小さかった子がこんなに育っているのだな。」など、子どもたちの成長の様子が見えてくると思うのです。特にキャリア教育の視点では、中高が連携して、さらに連携を押し進める必要があると思いますし、できれば行政の教育委員会のほうで、中高連携した取組みの柱を作っていただくと非常にやりやすくなるのではないかなと思います。そして先ほど、末次委員がおっしゃったように、高校生の姿を見て小学生、中学生が育つというような取組をされたほうがいいと思います。特に中高一貫教育校は、私立高校をはじめ、県立の３つの高校でも連携のノウハウを持ってらっしゃるけれども、こちらのほうには全然、そういったところが見えてきません。いろいろな学校や中高一貫教育校で取り組まれているノウハウも、他校へ広げていただくと、地元の高校はすぐ近くに中学校があるのですが、現状はなかなか交流ができていないのです。両校間の垣根が低くなり、教員どうしはもちろん、同じ教科での連携など、特に高校の教員の専門性などは、中学校の教員にとっては役に立ちます。もっと人事交流等もされたほうが、特に主体的、対話的で深い学びの観点からすると同じ方向性をもって取り組んでいけば、さらに質の高い教育が目指せるのではないかと思いますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

【半藤会長】
○音光寺委員の発言にありました、定員割れが続く学校の学級減問題についてですが、問題意識としては、事務局もおありになるということですので、今回の魅力づくりの中でも、ある程度そのあたりも踏まえる必要があろうかと思われます。委員各位、何かご意見等ありましたらお伺いしたいと思います。

また、小中高を通じた連携等については、これまでの会の議論を踏まえ、「地域の期待に応える魅力ある学校づくりの推進」の部分を少し強調して修正してきたところです。具体的には「地域との連携組織の設置等により、魅力ある学校づくりを推進」という記載がございます。この地域という言葉が、どういう概念を想定するかは人によってまちまちです。むしろ多様なものを包み込む意味でこうしていたのですが、今の御発言等から、小中高の連携が非常に重要だということになると、より鮮明に小中高と書かないまでも地域とは何を指すのか、どういうものがあるのかということを強調した書きぶりにすることは可能かと思いますので、最終答申に反映させることがよろしいかと思います。また、地域連携プラットフォームのようなものも、インパクトのある名称を示し、学校間の連携をイメージさせるようなものを提案することも一つかなと思います。各委員で、御知恵等がありましたら、ぜひ事務局へ具体的にお寄せいただければありがたいところです。では、夏木委員お願いします。

【夏木委員】
○まず、現在の各高校全体の取り組みが非常に素晴らしいと思います。魅力づくりのある学校づくりと同様、きちんと取組みができているということは、先日の学校訪問を通じて非常に感じました。ただ、最後まで書き切ってこそですので、これからどう細かいところを進めていくかも非常に重要と考えます。今回、いろいろと御報告いただいた中では、良い報告が少し多すぎたのかなと思います。改善するとすれば、入学した生徒が不満に思った点や、高校選択にあたって、なぜこの学校は選ばれなかったのかという、負の部分もきちんと精査していくことで、更なる改善が進むのではないかと思います。特に、先日訪問した熊本西高校のＮＴＴのリモートは、熊大生でも多分ついていけないレベルではないかと私は感じました。それが果たして、もちろん経験則としては大丈夫なのでしょうが、生徒に身につけさせるという観点では、選ぶコンテンツは非常に重要になってきますので、今後の精査は、非常に大事な作業になると思います。

まずＩＣＴについてですが、ＩＣＴは決して万能ではございませんので、通常、今までのふれあいを中心とした授業との明確な成果の差は、ずっと落ちていかなければならないし、今後例えば専門高校で、大型で高価な機械を使って学ばなければいけないときに、県で一台という体制になるかもしれません。そういったときに、どうやって実際にその機械に触れることができるのかという、ダブルスタンダードで、そういった面も並行して進めなければいけないと考えております。

また生徒募集の広報活動についてですが、先程他の委員からもありましたが、やはり小学校、中学校に対しての活動が重要です。提言では中学生となっていますが、進路を実際に考える場合、多くの保護者の方が、あまり高校のことを知られないままです。実は私のところにも、今のこの時期になって、個人的に高校についての問い合わせがあります。例えば濟々黌や熊本工業に行かせるつもりだったけど、いざとなったら受からないかもしれない。そこで、別の高校を選ぼうという時に、全く勉強されてないので、慌てた対応をされるという保護者は意外と多いです。また、逆に私立に通わせる保護者の方は、小学生のときからきちんと計画を立てて、子供たちと相談しながら進めていらっしゃいます。この差は非常に大きいと思います。私としてはやはり小学生の時から、高校生にふれてもらう関係性を築いてもらうという方向が、将来的には生徒募集の増大に繋がっていくのではないかと考えています。

【半藤会長】
○夏木委員がおっしゃるように、アセスメントは何事も極めて重要かと存じま

す。学校に不人気があるとすれば、なぜ不人気なのか、なぜ生徒が集まらないのか。それを白日の元にさらすのは、なかなか抵抗感もあるわけですけれども、アセスメントの観点からは、しっかりとエビデンスに基づいて、それを認識することが、その学校を魅力化する特効薬にもなるだろうと思いますので、そのあたりも深掘りしていく必要性があるのかなと考えます。それでは、副会長、越猪委員、今までのお話を踏まえて、また先生からの御意見を加えまして、御発言いただければと思います。

【越猪委員】
○１点目は先程、音光寺委員の方からありました、定員割れの学級減についての問題です。５０ページの記載についてですが、先生方の働き方とか、先生方の後ろ姿を見て子供たちが育つという視点から考えますと、先程、音光寺委員からお話がありました「学科改編等による学級減による定員割れの改善を図ることも重要だ」ということで、事務局から、丁寧な御説明をいただいたところですが、実際定員割れが継続している学校で、直近に、もうすでに学級減をしている学校もあると思います。既に学級減に取り組んだところについては、何らかの配慮が必要ではないのかと考えますが、それについて事務局から御意見を伺いたいと思っています。理由としましては、１学級が減ると先生が２人その学校からいなくなるということが一般的な学級減の仕組みだろうと思っています。私も学級減の学校に勤めたことがありますので、１学級減っていくと先生が２人ずついらっしゃらなくなって、３年間で６人の先生がいらっしゃらなくなります。そうすると、部活動の指導や、いろんな教育的な活動、総合的な探究の時間など、地域と繋がるときにマンパワーとして、必要な先生がいらっしゃらなくなるという切実な問題もございます。すでに学級減に取り組んだ学校については配慮が必要と考えますがいかがでしょうか。

【半藤会長】
○事務局、お答えよろしいですか？

【事務局】
○先程も申し上げましたとおり、５年以上の定員割れが継続している学校は１４校あり、そのうち、直近の過去３年間で学級減をしている学校が、実は３校あります。今おっしゃられましたように、その点については、地域への定着や、学級減した効果、成果を見る必要があると思っております。定員割れが続いているからと言って、短期間に何度も学級減を実施することには、非常に慎重な対応が必要であると考えています。

【越猪委員】
○はい。ありがとうございました。
　次は要望となりますが、学級減を実施される場合、先程、御説明の中にもありましたが、魅力化とセットでぜひお考えいただきたいという希望でございます。よろしくお願いします。
　もう一つ大きなことは、先ほど内村委員からありました、学校の先生は実はもう一杯一杯でいろんなことをやられていて、さらに子ども達の為にと、いろいろな活動をされると思っていて、なかなか外部の人と繋がることは、言うほど簡単ではないと考えます。水を差すような言い方なのですが、連携は小中学校であれば、地元と非常に近いし、顔が分かるので連携しやすいのですが、私も中高一貫教育校で、高校のいろいろな取組みをする時に、例えば「情報関係に詳しい方はどこにいらっしゃるのだろうかと探す際、足立さんという方がいらっしゃると聞くのだけれど、その足立さんという方の名前は聞くのだけれど、実際には顔を見たことはないし、情報交換をしたこともない。そんな人のところに突然行って、何か突拍子もないことを言ってどうしようか。」といったように、少し腰が引けるわけです。そういうことが県立高校の、特に普通科の学校の悩みでもあるわけです。そこで、いろいろなＩＣＴの人材育成なども含めてなのですが、地域と繋がる時にマッチングサポートのような、そういう組織があると、非常に高校の場合は助かるなと思っています。そして、そのマッチングサポートの仕組みの中で、１０年後、２０年後にどういう教育をその地域でやりたいのかということを具体的に議論できる場が設定されると、普通高校で仕事をされている先生たちも、非常に仕事がやりやすくなるのではないかなという意見を持っています。

【半藤会長】
○御発言いただきましたが、まず前段の、定員割れの学校の問題です。長く定員割れを起こしているということが、学校の魅力づくりにマイナスになることは、負のスパイラルみたいになって、価値に向かわないということで、非常に問題だと思います。さりとて単純に減らしていけばいいということでもなく、越猪委員がおっしゃるように、魅力づくりに資するものとして捉えていくという文脈が必要だろうと思います。そういうことを考えていきますと、現状からクラス減を考えるうえでは、ある程度明確な基準をもって、その指標に基づいて判断し、主観的な議論にならないようにしていくことが重要だろうと思います。そのあたりは、事務局に基準づくりみたいなものはお願いできるでしょうか。

【事務局】
○はい。例えば、我々が持っているデータに基づいて、シミュレーションとして、いくつかパターンを作成し、それを委員の皆様に一旦お見せして、御意見をいただくという方法はあるかと思います。何か案がないと御意見もなかなか出しにくいかと思いますので、そういった形でよろしければ作成いたします。

【半藤会長】
○では今回このような御議論をいただきましたので、定員割れの高校に係る学級数の問題については、事務局から可能な限りデータに基づいて、こんなことが考えられるというものをお作りいただき、それを各委員にお見せいただき、それを踏まえた提言案になるようにしていきたいと思います。次回までに、各委員に情報を提供することは可能ですか。

【事務局】
○はい。次が最後ですので、早急に作成しまして、できるだけ早く委員の先生方にお送りするなど、御意見をいただこうかと思います。

【半藤会長】
○提言案にさらっと書いてあることではございますが、このあたりはかなり重要な問題をはらんでいることもございますので、事務局に、定員割れの高校の学級減を考える場合には、こんな基準、こんな観点が考えられると、それを踏まえて議論していく課題であると、私たちが認識しうる資料を、次回の会議の前に各委員に御提供いただくように、事務局にはお手間ですけれどもお願いします。各委員、よろしいでしょうか。それを踏まえて、最終答申の文言等についても御意見がございましたら、次回の最終案の前までに事務局の方にお寄せいただくということで進めて参りたいと思います。
　いろいろ御議論をいただきました。それぞれの御立場からの幅広い良い視点が出揃ったと思います。これまでを踏まえて、もし御発言ありましたら、御自由に御意見いただければと思います。
　オンラインで御参加の奥田委員は、これまでの御議論をお聞きになって、どのような感想をお持ちですか。

【奥田委員】
○たくさんの皆さんから意見が出た、小中学校の連携というところは、確かにすごく重要だなと思いながら、改めて聞いていました。もう１点は、先生方の負担の面についてのお話もあったと思いますので、魅力化のための予算や人員

の配置、教員の研修等を踏まえて全体的に考えていければいいと思いました。

【半藤会長】
○ありがとうございます。委員各位は、他に何かありますでしょうか。

【音光寺委員】
○素晴らしく考えられてある提言だと思います。提言に書かれているスクール・ミッションについては、現在、国で論議されていることなのですが、実際に校長先生方は作られているのですか。来年度からスタートということですので、ミッションとこの魅力化が、マッチしないとこれは進まないと思うので、そういったところの整合性をぜひ図っていただきたいなと思います。提言だけの話になって、各高等学校の校長先生方や先生方ともマッチしなければ、絵にかいた餅になってしまいます。せっかくいろいろなすばらしい提案をされていますので、ぜひお願いしたいなと思います。

【半藤会長】
○学校の三綱領など、スクール・ポリシーみたいなものは、かつてもあったと思うので、これから作ろうとするものが、そういうものとどう関わるのか、同じものなのか、違うものなのか、そのあたりもきちんと整理して、作り上げていくことが必要かと思います。先ほど、私学には学校設立の明確な目的があるということでしたが、公立とて、もちろんそれがあったはずです。あったにもかかわらず、こういう議論になるのはどういう背景なのか。その辺りも突き詰めて考える必要があろうかと思いますので、ポリシーなるものをどうとらまえて、より学校の魅力化に資するものにするのか。そのあたりは委員各位からもいろいろ御提言をいただければと思います。

【田中委員】
○いろいろとすごくいいことが書いてあるので、ぜひ何か目玉になることが何か必要なのかなと思います。その時に、やっぱり熊本らしさということが、すごく大事ではないかなと考えます。全世界がコロナのこういう状況になっていて、中山間地の過疎化とか高齢社会とかの問題は、全国どこでも言われることで、皆さんそういうことで困っているわけですよね。その時に何が強みになるかというと、やはり「ピンチがチャンス」というわけではないのですが、５年前に熊本地震に遭って、あの時に全国、もっと言うと全世界の方が、熊本に震度７の地震が２回も起こり、その中で、子供たちが学んだことが、すごくためになると思います。それは東北でも、同じように、平田オリザさんという劇作

家の方がおられますが、オリザさんが、今そういうことをおっしゃっていて、その学びを復興の力にしなければならないという話をされていて、すごく共感します。ましてや、去年はコロナ禍のうえ、７月豪雨という形で、日本では、初めてコロナ禍での複合災害被災を経験しました。それまで全国からボランティアの方が集まって、復興ができていたことができなくなり、そんな時に、実は一番頼りになったのは子どもたちで、熊本地震の時も避難所の運営は、小学生や中学生が頑張ってくれたから、可能であったと言われています。今の八代、球磨川流域での復興には子どもたちも当然関わっているわけで、そういうところを強みにできるには、学校教育と災害は切り離されているわけではないと私は思っています。最近、行政の資料の中でもＳＤＧｓという言葉が必ず出てくるのですが、それと同じくらい、熊本地震や去年の７月豪雨は、強みに変えることができると思いますので、ぜひ防災や減災と提言に書くかどうかは別として、こういった状況においても熊本では、こういうすばらしい計画ができていると、強みにできるのではないかなと感じました。

【半藤会長】
○大事な視点かと思います。色々なものを盛り込んでいる今回の提言案ですが、熊本という立場を踏まえたものであるということは、大切なことかと思います。一例として、具体的な取組案の中に、熊本スーパーハイスクール構想というのがございますが、頭に熊本とついています。熊本らしいスーパーハイスクール、大変重要なこだわりかと思います。同じようにスーパーティーチャーも、例えば熊本スーパーティーチャーとする。熊本にこだわるネーミングというのは、ただのスーパーティーチャーとは、意味合いも変わってくると思いますので、熊本というネーミングにこだわるということは、その後にいろんな形で反映されてくると思います。最終答申案には、盛り込める限り、盛り込んでいければと感じたところです。
　時間にもなりましたが、御意見いただきまして、概ね答申案については、御理解いただいたものと思われますので、本日いただいた御意見等を可能な限り盛り込みまして、次回に向けて最終案を作成したいと思います。こちらについては、次回に御披露するという形になりますか。

【事務局】
○可能な限り事務局から委員の皆様に、修正等をしたものを提示させていただき、次回で最後になりますので、検討会がスムーズになりますように努力していきたいと思います。

【半藤会長】
○わかりました。最終案がまとまったところで、修正というわけにはいきませんので、事務局には御苦労をかけますが、丁寧にこの議論を踏まえた形で、最終案まで御調整をいただくことにします。各委員には事務局から最終答申案に向けたペーパーをお見せいたしますので、それらをお目通しいただいて、御意見等あれば、早めに事務局にお申し出ていただきたいと思います。それらを踏まえて、可能な限り御意見を盛り込んだ形で作り上げますので、最終版をまとめるにあたっては、委員長として私に御一任いただければと思います。この点、御了解をお願いします。では、特に御発言なければ、本日の会議はこれまでとします。事務局にお返しします。

【事務局】
○委員の皆様、御協議ありがとうございました。それでは最後になりますが、事務局から連絡させていただきます。

○次回の検討会ですが、３月２５日で調整させていただいているところですので、また御連絡させていただきたいと思っています。また本日いただきました御意見や御要望をもとに事務局で作らせていただきまして、また各委員の方々とやりとりさせていただきながら、最終の協議案に向けて、まとめていきたいと考えております。そして、最終的な案がまとまりましたならば、県立高等学校あり方検討会から教育長に御報告、御提出をいただき、その後、教育委員会に報告という流れになっています。詳細につきましては、今後いろいろやりとりさせていただくことになるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

○それではこれをもちまして、第３回県立高等学校あり方検討会を閉会します。委員の皆様、長時間にわたり大変御世話になりました。ありがとうございました。